

日本小児感染症学会若手会員研修会第 1 回水戸偕楽園セミナー

レクチャー 8 小児感染症学
—若手小児科医へのメッセージ

上原 すゞ子*

このたび、筆者の故郷水戸の地で、わが家の庭の向こうの偕楽園での小児感染症セミナーのご案内に感激していたら、重大なテーマをいただいてしまった。

筆者は 6 歳時に水戸で疫病にかかり奇跡的に救命された感動から医学を志した。医学部 3 年生の夏休みに都立駒込病院で伝染病の臨床と細菌検査の実習を契機に小児感染症とともに歩んだ 60 年、決して平坦な道ではなかった。千葉大学小児科では当時花形の疫病発症病機の研究、気管支喘息の臨床、小児呼吸器感染症の洗浄喀痰培養からの原因菌とその判定基準、インフルエンザ菌感染症とその予防—Hib ワクチン導入へと続くが、呼吸器細菌感染症の研究がやっと軌道に乗った頃、教育学部養護教諭養成課程の新設責任者として粉骨砕身、医学は夜の仕事となり、25 年間悲痛な日々が続いた。再び医学に復帰できたのは退官後であった。

千葉大学小児科時代から、インフルエンザ菌・肺炎球菌が気管支・肺感染症の原因菌の第 1・2 位を占めること、その後インフルエンザ菌髄膜炎をはじめ侵襲性感染症の重要性を世界の実情、わが国で実態調査を行って予防の重要性を訴えてきた。1968 年から小児インフルエンザ菌研究の第 1

人者 Dr. Sell と、1981 年から Dr. Robbins (NIH) の元で学び、WHO の急性呼吸器感染症 (ARI) 会議などに招請された折にも、千葉大学の研究に全面的な支持をいただいていた。医学部を離れてからも Dr. Robbins の元での貴重な体験を小児科教室に伝えることができた。彼の発案した Hib conjugate vaccine のわが国への導入を提唱してきたが、わが国の厳しい現実に悲嘆と焦燥の日々であった。

20 年遅れて Hib ワクチンが接種可能となり、「小児呼吸器感染症診療ガイドライン 2004」と「同 2007」をこれまでのエビデンスを生かして、関係各位のご協力の下に作成することができた。これら 2 つの事業について皆様との交見を望んでいた。

情報収集は誰にでもできる今日、若手小児科医の皆様には、ぜひ自らの発想で自らの体験に立脚した研鑽を進めていただきたいと願っている。

筆者のささやかな体験を随所に書かせていただいたが、後輩の方々の継承に「継続は力なり」を汲み取っていただければ幸いである。

今日まで、お力添えいただいた国内外の先生方、ご企画運営に携わられた森内浩幸教授、田中敏博先生に心からお礼を申しあげる。

* 千葉大学/埼玉医科大学小児科